

発見された河川流域は、第4図で見たように白亜系から鮮新統まで各時代の地層が分布したが、地層の広がりと、上厚内標本と考え合せると、漸新統の音別層群（第4図のB）か中新統の川上層群（第4図のC）、又は鮮新統の十勝層群本別層（第4図のD）のいずれからか産出したと考えられる。

#### ▼おわりに

この貴重な化石を発見し、浦幌町郷土博物館に寄贈下さり、広く研究に供された北原甲子生氏に心からお礼申し上げたい。この研究を進めるにあたり、北海道大学秋山雅彦氏には、標本の比較検討にご便宜をいただき、種の鑑定のためにご指導いただいた。北海道大学松井愈氏・東京大学犬塚則久氏には本稿の校閲をいただいた。以上の方々にお礼を申し上げる。本標本は、浦幌町郷土博物館に展示する。（\* 北海道教育大学札幌分校助手  
\*\* 浦幌町教育委員会主事 \*\*\* 浦幌町教育委員会学芸員）

#### 引用文献

- 秋山雅彦・熊野純男（1973）：北海道歌登町上徳志別産デスマスチルス、地質学雑誌第79卷12号、781—786  
犬塚則久・秋山雅彦・大槻日出男（1976）：上厚内で発見されたデスマスチルスの化石、浦幌郷土博物館報告第8号、2—7  
——（1977）：北海道

十勝郡浦幌町上厚内より発見された*Desmostylus*の臼歯、地質学雑誌第83巻第2号、139—141

木村方一（1977）：北海道中川郡本別町付近の螺旋岩砂岩層より*Desmostylus*の臼歯発見、地球科学第31巻4号、167—170

三谷勝利ほか（1959）：5万分の1地質図幅「本別」および同説明書、北海道開発庁

長尾 巧（1935）：樺太氣屯産*Desmostylus* : *D. mirabilis* nov.、地質学雑誌第42巻第507号、822—825

NAGAO, T. (1937a) : A New Species *Desmostylus* from Japanese Saghalien and Its Geological Significance, *Proc. Imp. Acad. Japan*, vol. 13, 46—49

—— (1937b) : A New Occurrence of a Small *Desmostylus* Tooth in Hokkaido, *Proc. Imp. Acad. Japan*, vol. 13, 110—113

岡崎由夫ほか（1972）：北海道釧路・阿寒町知茶布産のデスマスチルス臼歯について、釧路論集第3号、75—86

Tokunaga, S. and Iwasaki, C. (1914) : Notes on *Desmostylus Japonicus*, 地質学雑誌 vol. 21, 33

藤井宏惇（1953）：北海道石狩國雨龍郡古河雨龍鑛業所に於ける*Desmostylus*の産出、地質学雑誌第59巻

## 北海道陸別町で発見した4つのチャシ跡

\* 石橋次雄・後藤秀彦 \*\*

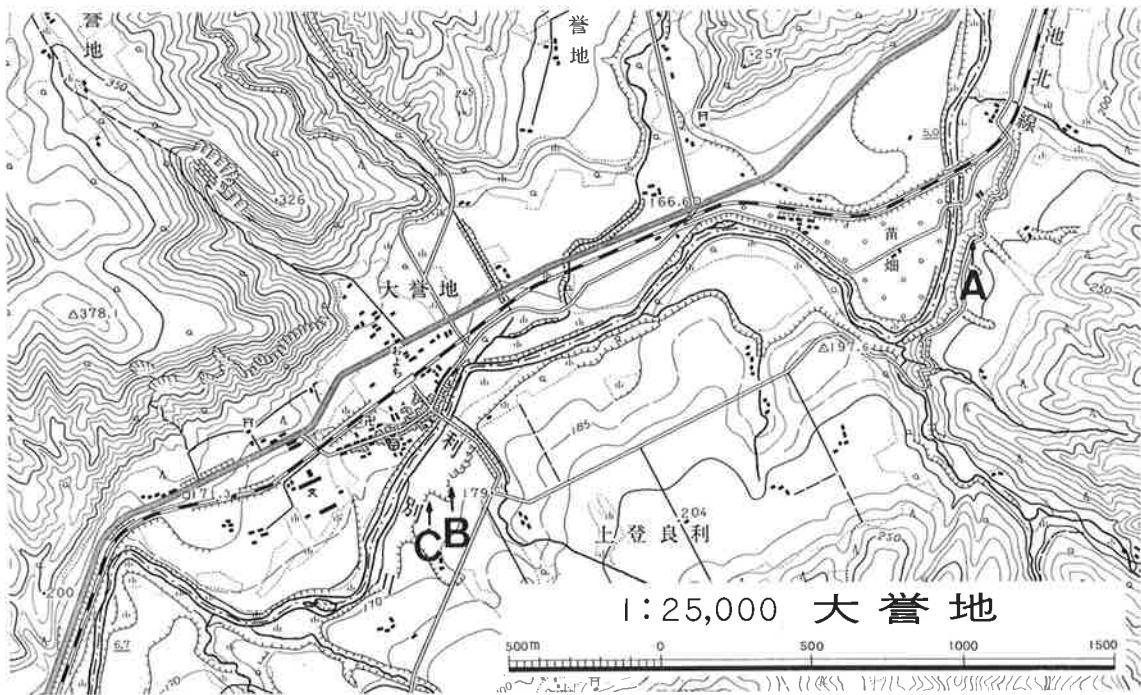
昭和52年度の文化財パトロールを実施するにあたり、筆者の一人石橋が陸別町教育委員会に日程等の連絡をしたところ、北海道埋蔵文化財包蔵地一覧表に未登録のチャシ跡が発見されたので、是非それを見てほしいということで、10月14日と11月8日の2回にわたって4基のチャシ跡を踏査し

た。

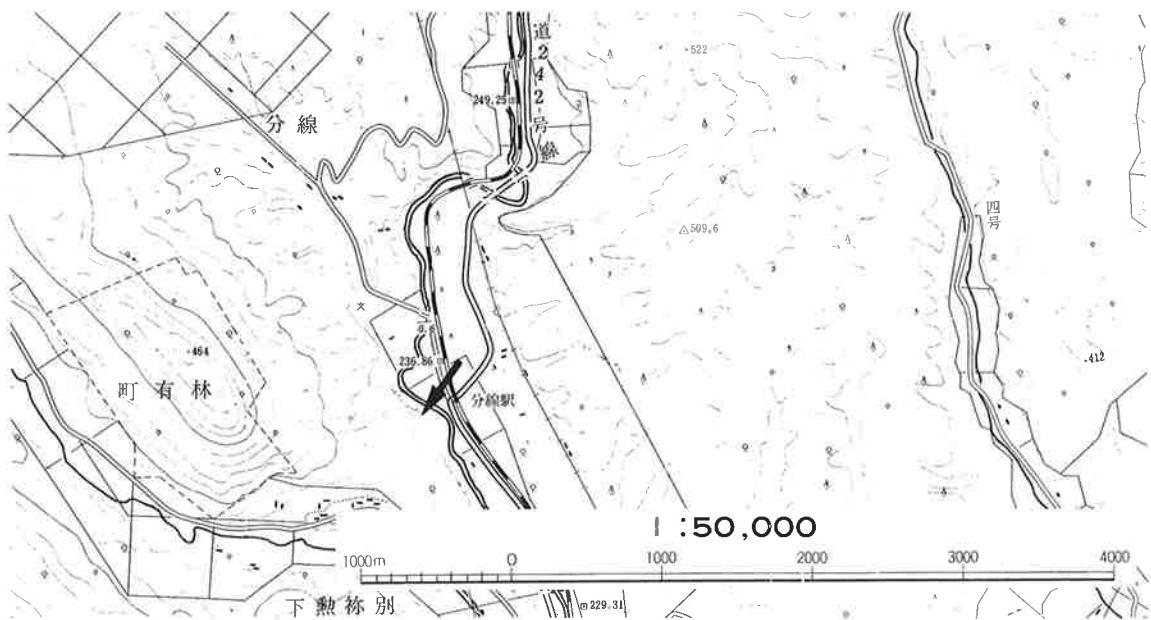
4基のうち1基については、既に『陸別村史』(岩佐、1938)の「登良利部落」の項に「本部落7番地には古戦場チャシあり、この附近より臼井忠平氏は大正5年に鉄兜を発見し同10年にも鎧及び石矢頭、鍋、鉈等の古物をチャシ内より発見し

た。鎧兜の2種は足寄市街の真宗大谷派寺院へ寄贈して現在している。」と記されているものである。更に登良利地区にはこのほかに2基のチャシ跡が

今回確認されたので、該チャシ跡を「トラリ第Ⅰチャシ跡」と呼び、他をそれぞれ「トラリ第Ⅱチャシ跡」「同第Ⅲチャシ跡」と呼称することとした。



Map 1 トラリ第Ⅰ～第Ⅲチャシ跡位置図 (A:第Ⅰチャシ跡 B:第Ⅱチャシ跡 C:第Ⅲチャシ跡)



Map 2 クンネベツチャシ跡位置図

また、ここであわせて報告する陸別町字勲禰別2番地13所在のチャシ跡を「クンネベツチャシ跡」と命名した。

### 1. トラリ第Ⅰチャシ跡

所 在 地：陸別町字上登良利7番地24  
土地所有者：陸別町字上利別原野基線 233番地  
鈴木 定一  
現 態：山 林

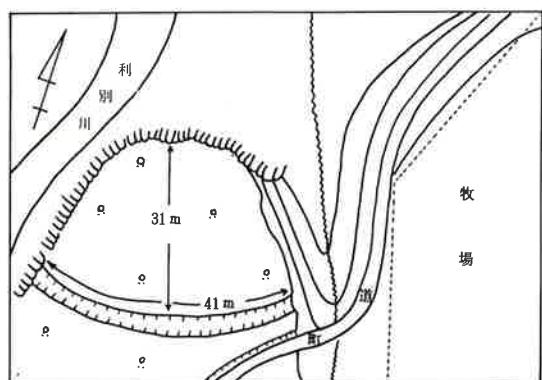
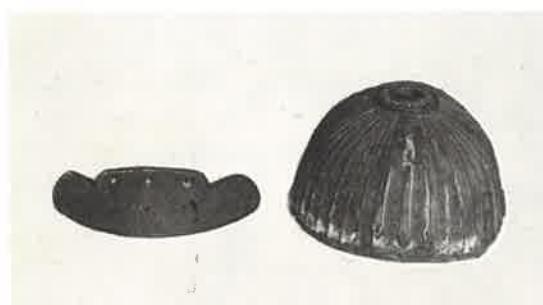


Fig. 1 トライ第Ⅰチャシ跡略図



PL. 1 トライ第Ⅰチャシ跡出土の筋兜

チャシは、利別川の左岸、東側を沢によって切られた標高190m、比高約25mの台地の先端部に所在する。壕は、台地の先端より約31mの箇所を東西に約41mの長さの孤状を描いて作られている。壕の現存規模は、幅約2m、深さ約1mで台地の基部にめぐらされている。壕の内外には壕の掘り上げ土が堤状に確認され、保存は極めて良好である。

現地を案内してくれた美濃島旦氏によれば、『塩別村史』に記載されている甲冑等は、「該チャシ跡より沢を越えた東へ約150mの地点で発見され、かつてはこの場所にも該チャシ跡と同様の壕があったが、その後の農耕作業によって埋められた。」

とのことであるが、現地形からはそれらの痕跡を認めることはできない。また、『塩別村史』にもその記事はなく、その所在は全く不明である。

甲冑の寄贈を受けた真宗大谷派寺院とは、足寄町西1区所在の証導寺で、先代住職が文化財に深い関心をもつていて多数の文化財等を蔵されていたようである。現住職安藤証憲氏によれば、鎧は早くに腐食して、現存するのは兜のみであるとのことであったので11月26日同寺を訪ね見せていただいた。本兜は、鎌倉時代末葉から室町時代頃に盛行した所謂「筋兜」に属するもので（笹間、1974）山上八郎氏によって南北朝期のものとされている（山上、1973）。その他の石矢頭（石鎧？）鍋、鉈の類は既に散逸して現存しない。

### 2. トラリ第Ⅱチャシ跡

所 在 地：陸別町字上利別原野東1線 208番地先  
土地所有者：足寄町字大誉地 毛利英信、一部  
河川敷地国有地  
現 態：山 林

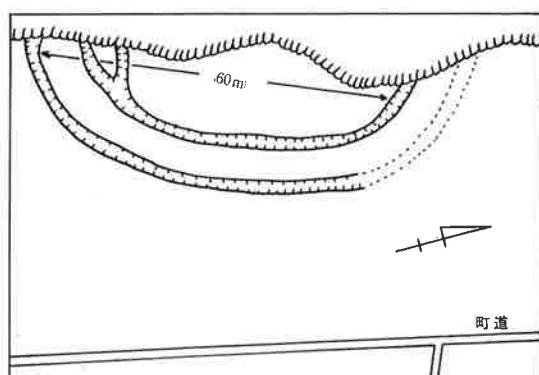


Fig. 2 トライ第Ⅱチャシ跡略図



PL. 2 トライ第Ⅱチャシ跡の内壕

本チャシ跡はトライ第Ⅰチャシ跡の南約1.8kmの利別川下流の地点で、利別川の左岸に所在する。チャシ跡の南側は小さな沢によって区切られており標高190m、比高約20mの台地の縁辺にあたる。

チャシは台地の縁辺を南北に約70mにわたって掘られた2条の壕によって作られ、内外壕とも極めて大規模で、現存規模は外壕は幅約5m、深さ約3m、北側の一部は農耕作業によって埋めただされている。内壕は幅約7m、深さ約4mで南端は二股に分かれている。

チャシ内部は東西約10m、南北約50mと極めて狭長である。陸別町字上利別原野東1線220番地に居住の佐藤大次郎氏によれば、「大正12・3年頃チャシの周辺において石鎚・刀子等の出土があった。」とのことであるが、いずれも散逸して現存しない。

### 3. トライ第Ⅲチャシ跡

所在地：トライ第Ⅱチャシ跡と同じ

土地所有者：トライ第Ⅱチャシ跡と同じ

現況：山林

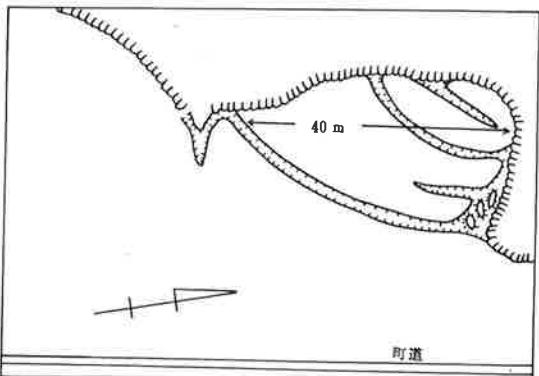


Fig. 3 トライ第Ⅲチャシ跡略図



PL. 3 トライ第Ⅲチャシ跡の内壕

本チャシ跡は、トライ第Ⅱチャシ跡の南約100mの地点、利別川の左岸標高100m、比高約20mの北と西を利別川の浸食によって削られて崖となった台地の突出部に位置し、台地の基部を北から南に掘られた2条の壕によって作られ、それの中間にチャシ内部に切り込む小壕が設けられている。壕は内外壕とも幅約6m、深さ約4mで小壕もほぼ同規模である。これらの壕は、トライ第Ⅱチャシ跡と同じく極めて大規模なもので十勝地域では他にその例を見ない。

外壕と内壕との間隔は約10mで平坦、内壕の内部は東西約10m、南北20m、中間壕が南北に約10m切り込んでいる。上面は尾根状となって平坦部はほとんどない。なお、外壕と内壕はチャシ北端で連絡しており、北側は崖に向かって4カ所が切れ、3つの小丘がとり残されたようになっている。

### 4. クンネベツチャシ跡

所在地：陸別町字勧禰別2番地13

土地所有者：札幌市豊平区平岸56（後藤保江方）

佐藤 忠

現況：山林

本チャシ跡は利別川右岸の北から南に突出する小丘の尾根上にある。標高200m、比高40m。チャシ跡は昨年山林の伐採によって発見されたもので壕の南約10mの所まで伐採されている。

チャシは小丘の尾根部に長方形にめぐらされた壕によって作られている。壕の幅は約3m、深さ約1.5mで、チャシ内部は東西の幅約20m、南西約57mある。チャシ全体は尾根状を呈し、平坦部は

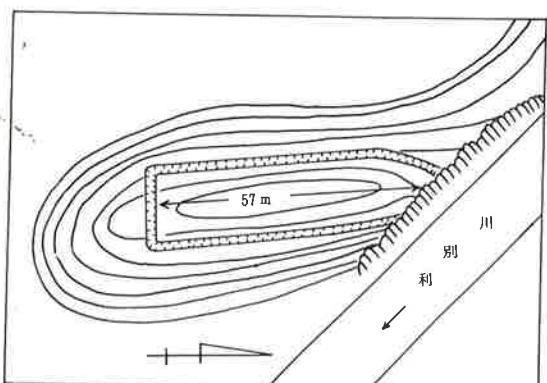


Fig. 4 クンネベツチャシ跡略図

少なく、壕は北端においてそのまま崖に切り込まれている。

本チャシの壕は長方形の周壕を呈しているが、同類の壕をもつチャシの例は知らない。強いてその類型を求めるにすれば、丘陵の尾根線に沿った直線壕ということで、足寄町トメルベシペチャシ跡および広尾町メノコチャシ跡をあげることができるが、長方形周壕として一型式を考えた方が適当なのかもしれない。

## 5. 地名について

### ① クンネベツ

岩佐（1938）によれば、「クンネは黒、ベツは川、黒川の意。蓋し此処は湿地多く流れ出る水が褐色或は黒色を帶びて汚濁す。アイヌは元来クンネベツより落合迄の流水は呑まず」とある。（註1）本チャシ地点より利別川を約2km下った所で、クンネベツ川と利別川が合流しており、両河川にはさまれたクンネベツ丘陵の東縁にチャシが設けられている。

### ② トライ

トライの地名については『達別村史』にもその記載はなく、村上啓司氏のご教示によれば更科源藏氏の『アイヌ語地名解』だけにその解釈がなされているようである。それによれば、トライは「ドラシ」の訛りではないかとされている。しかし、村上氏によれば（註2）「ドラシ」が訛ったものとの解釈は発音法からして無理であろうが、「ドラシ」という文字が誤記・誤読等で「トライ」となることは充分考えられるとしている。更に村上氏は、文字からの転化とすればトワリ→トライも充分考えられ、トワリ（トワル）→ぬるい（水）、（ぬるまる）だとする例はあるが確証はない。又、語形の変化が昔からないとすると、あえてこじつけてみるとすれば、「トライ○○」という地名の下略形とみる外はない。○○はペツとかナイとかの名詞で、トラ=つれ立って、リ=高くなる○○と解し、この川の一つ隣りのトメルベシペ川と連れ合って上る川との意にとるほかはない。と、いうことである。

ちなみに、トライ第I～IIIチャシ跡周辺には、トライ第Iチャシ跡の南100mの所にはペンケトライ川が、またトライ第IIIチャシ跡の南1kmの所にはパンケトライ川があり、パンケトライ川はペン

ケトライ川とトメルベシペ川のちょうど中間の位置にあり、更にペンケトライ川の北にはほぼ同距離の所にクンベツ川があることから、これらの河川が「連れ合って上る川」と考えることも可能かもしれないが確証はなく今後の研究を待ちたい。

## 6. おわりに

本稿をまとめるにあたり、次の方々に格別のご教示・ご援助を賜った。銘記して感謝申し上げたい。

釧路支庁・村上啓司（アイヌ語地名解）、証導寺住職・安藤憲憲（兜由来・写真撮影）、帯広市図書館・黒島重夫（兜由来）、陸別町教育委員会・浜田誠（現地案内）、陸別・美濃島旦（現地案内）、陸別・佐藤大次郎（チャシの出土品）

\*（帯広柏葉高校教諭・浦幌町教育委員会学芸員）  
\*\*（浦幌町教育委員会学芸員）

**註1** 『達別村史』の〔参考〕に次のような記事が載っている。「闘牧場及その関係地にして明治36年11月寛翁「斗滿考」として書遺し、次いで闘又一氏これを補正追加せしものなり。主としてアイヌ人トミソク。エコサックル。に訊ね。更にイカイラン。イタキレツバ。ヤイキオツク。ケイキチ。イルイサン及びアイヌ研究者アイヌ理解者（妻はアイヌ人）原鐵二郎氏より聞きたるものなり。

**註2** 村上啓司氏より筆者の一人後藤宛の私信。

## 引用文献

岩佐幸治（1938）達別村史、達別村研究会、達別  
笹間良彦（1974）図解日本甲冑事典、雄山閣出版、

東京

山上八郎（1973）日本甲冑の新研究、歴史図書、  
東京

1977年11月30日 印刷

1977年11月30日 発行

編集 後藤秀彦

発行責任者 家村克行

発行所 浦幌町郷土博物館

北海道十勝郡浦幌町字東山町23番地

印刷所 大同出版紙業株式会社

北海道帯広市西7条南6丁目